前夜祭

ひとみが彼を誕生日だからと言ってオフィスビル、できたばかりのアジアセンタービルの最上階にあるフレンチのレストランに連れ出したのは、それが彼女にとって最後の出勤日でもあったからで、いかばかりかの詩的な情緒に捉われたものではなかった。彼女のオフィスはそこから五階下にあった。風の強い日は揺れることもあり、居心地が良いとはお世辞にも言えなかった。彼の、つまり林の勤めている会社は、そこから徒歩で数分のやはり完成して間もないセントラルエステートという螺旋階段で有名ないかつい建物の中にあった。彼は地方出身者であり垢抜けていなかった。理科系で口下手だった。何を尋ねてもあまり興味が無いとしか言わず、いわゆる仕事の虫のような男であった。仕事に関して尋ねると守秘義務があるとか、国家機密に関することだからと逃げ腰だった。しつこくひとみが尋ねると君に語ったところで仕方ないだろうとバカにしたような通り一篇の返事しかなかった。何故だか国家機密と彼が言うと信憑性が高まって過去の男友達が言うのとはぜんぜん意味合いが違うようにひとみは感じる。商売柄ますます聞きたくなるのだが、それは本当にヤバいことになりそうかもしれないと自分を抑えるのに苦労することが何度かあった。ただ、最近は違う、彼に魅かれたわけではなく、自分や同僚たちのしている仕事が虚しく感じられてきて、十年間で随分と自分をすり減らしてきたのだと思わざるを得なかった。

元はといえばひとみも冴えない女だった。ひとみは擦り切れたストッキングのほころびを上司から指摘されて顔から火の出るような思いをしたこともあったし、ノーメイクを咎められたこともあった。いずれもRという男、彼女の上司、ちょうど父親と兄の中間くらいの年齢の、外見はありふれた男だったが、彼はずうずうしくも彼女の心の中に入り込んできた。そのうちには、仕事やプライベートのさまざまな手ほどきを受けてひとみはかなりの成長を遂げたのであった。おりしも、数年続く、株価の成長にうまく乗ったという感じでもあり、ひとみの出来高給は入社の頃には考えられない高給に昇りつつあった。だがようやく、といった感じでもあった。すでにRもひとみも相当に痛めつけられていたのである。噂ではRの借金は十億とも二十億とも言われていた。妻子とは絶縁し、家を売り、それでもどこからか金を調達してきて、自社の株を買い漁った。いや買い支えたと言った方がいいのかもしれない。そうしてとうとう、自社株は約十分の一まで落ちたその日に、彼は衝動的にセントラルエステートの螺旋階段から身を乗り出して数十メートルの吹き抜けをまさに落下しようとしていたのである。幸い、その時にひとみや他の同僚たちがRにしがみついたために彼は自らの意志を砕かれてへなへなとその場にへたりこんだ。体中の汗が噴出していた。血のようにひとみには見えた。彼女も恐ろしさを感じた。それはまだわずか二年前のことに過ぎない。ところが神はRを見捨てなかったようだ。早くもその日の休憩時間を過ぎて午後にさしかかる頃になると僅かばかり株価は持ち直してそれからする

すると上昇を開始し始めたのであった。まさに奇跡のようにも思えた。それから数日の間に上昇を持続して彼は助かったのであった。ただ醜態を晒した彼は休養を余儀なくされ会社からは一時的だが姿を消した。いうまでもないことだが彼の手法は法に触れるのでまっとうな方法で自社株を購入していたわけではないし、会社の危機を救うためにそうしていたわけでもない。まして投機家としても一社員としても、たとえ役員であったとしても誹られはすれ褒められた行為ではなかった。ただ生命を掛けるという点で何かしらの恐怖感を全社に知らしめて彼は伝説的なカリスマに祭りあげられることにはなった。醜態は醜態であるが、真似ができないという意味かも知れない。役員たちも彼を処分するのは憚られたのであった。それに自社株を買っているというのは噂に過ぎず、なんら痕跡をとどめることはなかったのである。その日を境にひとみの業務は一変した。もはや外で営業することはなくなってしまったのだから。

　眼の前の林は紹介で知り合ってから何度かこうして逢っているのだが、片時もパソコンから目を離さない。彼は仕事をしてもいいかと尋ねてきた。ひとみは少し面食らったが、年下のまあまあの顔立ちの林に甘くうなづいてしまった。初対面の初日を除いて。さすがに初対面では彼もそんなことはしなかったが、翌日からは平日だったこともあり会社帰りに待ち合わせしてふたりとも仕事をしながら食事をする日が続いていた。断ったら終わってしまうような気がしてセントラルエステートには似つかわしくない昔の喫茶店のような隅で何度か日替わりの夜の定食を共にした。ひとみとて残業が残っていた、携帯のメールとスマートフォンの二台を充電しながら使用すれば何とか事足りる用事がほとんどだったのでオフィスに戻る必要はなかった。次第に彼に同調していくのかいつしか自分も仕事に熱中するようになった。いったい私たちはどうしてここで働く羽目になったのだろうか？よくわからないけど、まあいいかという感じだった。彼に夢を尋ねると夢は海外勤務だと言った。あたしもそれは気に入った。世界遺産めぐりなどもしてみたかった。古代の遺跡の隣りで仕事をするのも悪くはない。仲介をしたひとみの会社の後輩が説明したところの変な人と言うのがもっとも当たっているのかもしれない。変な人も都合の良くなる時もあるのだ。もうどういう人物であるかはもうわからなくてもよくなっているのかもしれなかった。ひとみはとにかくオフィスにいられなくなっていたのだ。その理由は様々だが、彼を紹介してくれた後輩でさえもひとみとすれ違っても無視するようになっていた。ひとみは会社で表彰されてからというもの、孤立無援になってしまった。表彰されたといっても大方、毎日ひたすらに謝っているだけなのであったが。謝って顧客の解約を防いだだけである。ひとりだけは別の理由から疎遠になりつつあった。それがR課長であった。あの日はもう四年ほど、今日から数えるとちょうど四年前だったろうか、未曽有の地震と原発事故に見舞われた直後の週明けはマーケットもまた揺れに揺れたのだった。R課長が衝撃のあまり殉職を思いついたのも無理はなかった。東京電力に投資していた人々は計り知れない損失を被ったのであった。そうして他の会社はいざしらず、東京電力に関しては今もって株価が戻ることはないし今後もほぼ期待することさえもできない。マーケットでの損失

はマスコミで報じられることも大衆の同情を買うこともない。非情の世界なのであった。大衆がそう思うように政府もまたそう思っていてそんな投資家たちを救済するほど甘いものではなかった。そして彼らがそれまでに投資家ら甘い汁を吸っていたかというとそんなことは断じてなかったと言っていいだろう。バブルを頂点として東京電力は右肩下がりに下がり続けていて、ついには原発事故によって奈落へと突き落とされたのであった。それはこの国の運命と言ってもいいのかもしれない。

翌日からRは消えた。無断欠勤が始まった。ほぼ一時間おきにひとみは彼の携帯に電話を掛けたが電源は喪失していて徒労だった。彼が命を絶つのではないかという危惧はもちろんあった。投資家たちの不安に満ちた苦情が相次いだ。彼は東京電力を推奨していたわけではないが日経平均株価が下がれば軒並み下がっていたのだった。それに関してはわからないと言うほかなかった。ひたすら謝罪するしかなかったのだが、私は何のために誰を代表して彼らに謝罪しているのだろうかという想いがひとみの胸に去来して枕を濡らす夜が何度もあった。いったい何を代表しているのだろうか？　この証券会社？　いやそうではないだろう。日本政府？　いやそうでもないだろう？　ではマーケット？　資本主義？　そうかもしれない。グローバル資本主義の代表として謝っているのか！　そうかもしれなかった。なぜなら世界中の証券会社の私のような窓口担当者が私と同じようにアジアの片隅の電力会社の大暴落によって損失を被った人々に謝罪しているのだろうから。それによって不条理にも職を自ら失う人々もいるに違いなかった。そうはいうもののひとみは今回のRの危機管理に対しては非常に腹立たしく思った。彼に救援を乞いたいわけでもない。彼を心配しているわけでもない。当初の頃はそうであったが、日が経つにつれて下げは一時的なものであったから、銘柄によってはそれほどでもなかったから、もちろん不安に満ちてはいたけれども。課長がマーケットの荒波を避けてどこかへ行ってしまったのは敵前逃亡に等しく、許されることではなかった。支店長からも何度か消息を尋ねられたが、見つかりませんとしか言いようがなかった。だがこのぼんくらの支店長は知らないのだろうが、管理部長に相談すると社内の社長の直接指揮する内部監査チームはRの居所を突き止めてコンタクトを取っているということであった。それは当然だろうとひとみは胸をなでおろした。Rが個人的にいなくなっても会社にはさほど影響はないけれども、Rが何をしでかすかは計り知れなかったからである。管理部長もややぼんくらであって、何かあったら私に言ってくれとだけひとみに告げたが、その日のうちに名前も言わない内部監査チームの誰かからひとみに連絡があった。守秘義務が君にはあると言ったうえで、われわれはRをコントロールできるようになったから安心して日々の業務に専念してくれ、君の活躍はわれわれは十分に評価している、近くRも復帰するのでしばらくは部長は不在であるが何かあったらこちらから指示する、Rとコンタクトできたらこちらに報告するようにと言ってきた。ひとみは言葉に詰まった。内部監査チームは、私とRとの肉体関係までも把握しているのだろうかという気持ちになったが、それは過去のことで、ないと言い切ればいいんだろうと開き直った。まさかRが監査チームに吹聴することもないだろう。

それからまた週が巡って出勤した月曜日、今日こそはと思ってRに電話を掛けた。はたして彼はすぐに電話に出た。いろいろあって彼には別段何の感情もなかったが、少しも心配していなかったかと言えばウソになる。彼が電話に出たことで安堵した。しかし、彼は思いがけない言葉を吐いたのだった。

「側頭部が、ね。ズキズキと痛むんだよ。吐き気がおさまらない」

「それは大変ですね。それで電話になかなか出られなかったんですか？　安心しましたけど私がもう限界なんですよ。疲れ切りました」それにはRは答えない。

「キミ、あの時だな、あの瞬間にだよ。思い出してごらん。キミは私の側頭部をハイヒールのカカトで蹴り飛ばしただろう？　憶えてないか？」

「そんなことしませんよ。誤解です」ひとみは笑いながらもなお彼の言葉が気になって電話を片手にデスクに身体を寄せて片脚を伸ばしてハイヒールを脱いでみた。するとカカトは確かに形状が変わっている。けれどもまさかそうですねと言うわけにもいかず、たいしたこととは思えないからあくまでシラを切ることにした。

「まあ、それはともかく俺は一生一代の大勝負に出ているから会社に行くか行かないかなどという細かな事には拘泥しないでくれ。会社の奴らだって信用できないんだよ。まあ内部監査チームは信用するしかないけどね。信用しなかったらまったく根底から崩れてしまうから。それに彼らもマル秘資料も俺に差し出してくれているから一応信用しているよ。あ、今、どこにいる？　窓口？　それなら、受付に行ってくれないか？　盗聴器が仕掛けてあるかもしれないしキミの隣の奴が訊いているかもしれないから。いいか！　あらゆる奴を信用するな！　情報を売るとは思わないが、情報を漏えいする可能性は十分にある。それから同業他社に通じている奴もいるからな。内部監査の調べたところではキミ以外は何等か外部とのコネクションがあるんだぜ。まったく驚いたよ。あいつら一日中、こんな仕事をしていたのかと。まあ一円にもならないんだけど、それは重要なことかもしれんよ」

「はあはあ、いま移動します。でも受付の白井さんにはどう言ったらいいの。そんな急に替われって言ったって」

「それぐらい考えろよ。じゃあ白井のところまで行ったら俺に替わってくれ。少し早いが昼食を共にするから駅まで来いって言ってやるから」

「それ本当なんですか？」

「本当のわけがないじゃないか」

「ああ、俺は今、ＲＯＥの公式を使ってポートフォリオを組み合わせているからあんまりくだらないこと言うんじゃないよ。とにかく受付まで行ってくれたら、面白いことを訊かせてやるから。すぐに移動すること！」

「顧客から電話が掛かってきたらどうするんですか？　苦情がかなり多いんです。ほとんどは苦情です、まあ繋ぎ止めはしましたけどね。おかげで表彰されましたよ」

「そんなの謝るだけならキミがやる必要はないじゃないか？　そんな業務誰にでもできるだろう、管理部長にでもまかせとけ」怒鳴るようにRは言う。

「ああ、そうなんですか。表彰されたんですよ。会社から」
「それはご苦労様。だがなあ。そんなの気にしてたらこんな商売やってられるか？　儲かって感謝されたことなんてあるかよ。儲かったら当たり前だって思うのが客じゃないか！」
「……」
「まあ、東京電力株には俺でも同情するけどね。俺は辞めたことになったから君の普段の業務は俺には関係ない。キミは課長になったんだから好きにしたらいいだろう」
「どうしてそんなことになっているんですか？」
「それは仕事をしやすくするためさ。あと退職金が少ないけど出るからね。あ、後任は情報漏えいを避けるために不在だから。だからお前は課長なんだよ。誰の指図も受けなくてもいい。あたしが課長なんですよねって管理に言ってごらん。困った顔して頷くから、はっは。ああ、痛い」痛いというのは激痛がどうやらRの脳奥にサーベルを突き落としたらしい。ひとみはRの言ってることは支離滅裂で理解が困難だと思いながらも、それでも常人よりはなんとなくの範疇を超えて細い糸筋を掴んでRの指示するがままに行動することにした。ともかくも行動が大切なことは営業職である以上は理不尽であっても全うしなければなるまい。
　携帯電話を握りしめたまま地上階まで降りると受付の社員の白井の横顔が見えた。彼女は去年入社したまだ新人であったが、TVに出てくる歌手グループの末端の組織にいたこともあってプロポーションがよく、華々しい顔立ちであった。
「今日の予定は？」
「え、なんですか？」
「なんですかって？　だから今日は誰か重要な人物でも来るの？　財務省とか税務署とか」
「ああ、来ないです、強いていえばユーロ証券の武者小路氏くらいでしょうか？」
「え、まあなんて失礼な言い方なんでしょう！　大物じゃないの？　TVでよく見る大物アナリストなのよ！　ちょっと何時なの？」
「十一時ですね」
「あと少しじゃないの！　誰に逢おうとしているの？」
「そんなのダメですよ。先輩何を考えてるの？　守秘義務違反ですよ」
「あたし、今日から課長になったのよ」
「そんなこと言われても急に。冗談はよしてください！」
　もちろん、ひとみだって白井葉子の入社年次で大物アナリストの名前を知っていたわけではないのだが。
　そのとき、Rのキンキンと甲高い声が携帯のデジタル化した無機質な音のように耳に飛び込んできてあわてて携帯を顔から遠ざけた。
「おーい、その話もらったぞ！　武者小路と緊急対談だ！　誰に逢うかなんて問題じゃない。今では俺は社内の神になりつつあるんだから、誰にも遠慮することはない。俺に替われ、俺だおれだ」そんなことを言われても二週間やそこらで神とは大げさな。何か秘策で

も思いついたのだろうか？　株価は確かに下げ止まって若干の上昇傾向を見せていたがそのまま上がって行くとはとうてい思えなかった。それとも何か確信でも掴んだのだろうか？

「それって無茶です！」聞こえたのか、白井がこの場に及んでオヤジギャグで反応した。

「面識があるんですか？」ひとみが尋ねる。

「向こうはしらないんだろうけど、俺は知ってる。ＴＶでよく見ているからな」

「彼はいいと言うのでしょうか？」

「ネタになりそうなら、ＯＫと言うんじゃないのかね」

「でもあの人、有能とは言えないでしょう？」

「だからいいんじゃないか」よくわからない返答。

女子ふたりは顔を見合わせて沈黙した。ふたりの脳裏に難事業という言葉が浮かんだ。

「あたし、イヤです。そんな有名人にいきなり対談を申し込んでも無理だと思う」白井は泣き出しそうになっていた。「とにかくさ、あんたコンビニでも行ってさ、とりあえずお弁当でも買ってきてよ。その間にＲ課長を説得するからさ」

「そもそも吉沢先輩はなんのためにここにきたのですか？　受付できるのですか？」

「まあ失礼ね！　あたしだって二十代前半は受付経験あります！　もちろんあなたにコンビニ弁当を買ってもらうためよ、カルボナーラでいいわ」

「なにかにつけ融通のきかない、せち辛い世の中になったものだなあ。おい白井くん、君の真面目さは評価できるし、所属部に報告してもいい、秘書課にも抜擢してあげてもいい。ただし君は臨時ボーナスのチャンスを自ら失いつつあるってことをお忘れなく」そう言われてしばらくためらっていたが、ようやく白井はその場を離れてこそこそとコンビニに向かい始めた。

「で、課長、もう大丈夫と思いますが、何の話でしたっけ、手短にお願いしますよ」なんとか武者小路が来るまでに話を終わらせて部署に戻ろうとひとみは考えていた。まさか、武者小路との対談を本気で考えているとは思わないし、それはわたしがすべき仕事ではないし、ここは白井にやらせてもいいことだった。そう彼女の美貌なら武者小路も笑顔で応答してくれるかもしれない。彼女は無責任にそう考えた。

「実はな、俺、最近あいつが下がり続けていただろう。それでもうどうしようもなくなっちまってな」

「知ってます。だってあの日あんなことをしたのはあれが下がり続けていたからですよね」あれ、というのはある会社の株であった。公にはできないが自社株だった。噂では誰もが囁いていたがそれは本当だったようだ。Ｒの含み損は二十億とも三十億とも言われたがそれはＲの顧客知人を含めての金額であって、仕手をしているわけではないので一社の損失でもなかった。しかし決定的なことは絶対に潰れないだろうと言われていたＢ社の倒産である。倒産してしまってはどうしようもない。持っていてもただの紙切れである。Ｂ社での失敗はかなりの痛手でありＲは自宅マンションを売却し会社を見かけではあったが退職

して退職金を貰う羽目になった。だからもう課長でもなんでもない、という内容をひとみに告げた。そして全財産を失ったRは妻とも別れた。子供は妻が引き取った。要は全てを失ったのであった。それでも会社はRを見捨てなかったのでRは頼るところは会社しかないという。そう言われても噂とは微妙に異なっていて真実はどこにあるのかわからない。

「で、これは冗談と思ってもらっても構わないのだが、君のマンションに同居させてもらえないだろうか。もう毎日マンガ喫茶で寝泊まりするのに疲れてしまってね」

「それは冗談としか思えないんですけど」

「じゃあ私が復活したら、どうだ？」

「どうなんでしょうね」それはありえないだろう！　確かに彼を愛していたこともあったかもしれない。ただなんというかやっぱり合わなかったというのが本音だった。むろん年齢的なこともあるのだけれども、彼はあまりに不安定だ。ひとみは不安定な生活に疲れてきたのだから。

　そして、その旨を告げた。彼は憔悴した声を挙げた。

「今回のチャレンジに対してのモチベーションにしたかったんだけどな」

「若いですねR課長。いえ株に対するリベンジならわたしは応援するにやぶさかではないですよ」心にもないことをひとみは言った。けれどもRは彼女の心変わりをまったく気にもとめない、気が付かない、彼は信じきっている、断られてもまだ信じている。それはマーケットに毒された人間特有の鈍感さであり都合の良さだった。そうして彼を裏切る多数の腹心を生み出すことになるのだ。

「いやあ、まあなんとなくはわかるがね、なんとなくは、女と言うのはそういうもんだよ」

　またしても意味不明な言葉だった。その的外れな言葉はひとみが彼を見限るには十分過ぎたのである。

「成功してマンションを買い戻せば奥さんも戻ってくるんじゃないんですか？」

「それもなんだかなあ」

「すいません。あたし課長の言われることよくわかるんです。ただ最近不安定な生活に疲れてきて。やっぱりお金だけがすべてじゃないと思うようになってきたんですよ」

「俺だってそりゃそうだよ」

「いえ、だからですね、本当に安定しようと思って同僚から彼を紹介してもらったんです。エンジニアです。先日逢ったんですけど、一緒にいて悪くない感じです。楽なんですよ。資本主義には無関心ですし」

「資本主義の恩恵を思い切り受けてるくせにな」

「はい、電機メーカーの開発です」

「いやそれ以上は言うな。インサイダーになる」課長は観念したようだった。そのとき会話が途切れた。沈黙が続いた。それで白井が叫んでいるのがわかった。コンビニから戻ってきたのだ。

「では、お話はそういうことだったんですね」気を取り直してひとみは課長に訊きただし

た。
「ああ、そういうことだ。それ以外の話は誰にもできない。ああ、武者小路のことなんだけど、あれはもういいよ。急にどうでもよくなった。まああいつのことだから嗅ぎ付けるだろうからね。こっちから言わなくても。それにわが社に来るなんてすでに嗅ぎ付けたか、誰かが呼び寄せたんだから俺の出る幕でもない。今回のプロジェクトは俺が発案したんだけど既に全社的な取り組みになってるから、もうだいたい俺の仕事は終わっているのさ。あとは俺のアイデアを会社がどこまで認めてくれるかにかかっているんだが……」
「どんなアイデアなんですか？」ひとみは話を合わせていただけであった。目の眩んでいるRはちっとも見抜けない。
「ああ、そのうち文書にしてメールするよ、まあざっくりしたものなんだけど。キミ数式なんて興味ないだろう。だから大雑把に説明するよ。ただ電話で顧客が問い合わせてきてら投資信託をとにかく薦めるんだ。そのパッケージがすべてだ。中身の説明は乞われたらしなければならないが、パンフレットだけ渡しておけばいい。余分なことは言わなくてもいいし、まず確実に儲かるだろうから自信を持って販売すればいい。まあ一般の顧客はね、その投資信託だけで十分だと思うよ。もちろんキミが繋ぎ止めてくれた顧客にも解約してもらって新しいこいつを買う必要はあるね、悪いけれども私たちは手数料を稼ぐのが目的なんだからね。まあ会社を辞めている私には関係ないが一応キミの今後の方向性は示しておかないとね、あんまり無責任だから」
だがそういう話でこれまでに何度苦汁を味わわされたかとそのたびごとの場面をひとみは思い出して、この人相変らずなんだと思わずにはいられなかった。やはりもう会社は辞めようとひとみは思った。その何か嫌なものでも踏み潰したような違和感はどうにも気持ちが悪く、耐え難かった。いつの間にかひとみはR課長との通話を遮っていた。遠くでこちらを見ている白井の無垢な微笑みが疎ましく思えた。
それから数人が白井の周囲に現われたようだ。彼らが武者小路とその御一行なのだろう。背の高い男を中心にして談笑しているのが見えた。彼らに見つからないようにひとみは足早に遠ざかる。ひとみは彼が恋しくなった。彼がどういう人物であれ、おそらくはRのような男よりはマシな気もした。
数カ月が過ぎた。それからもRとは接触していたが仕事の話しかしなかった。Rのよこしたメールは開封せずにそのままだ。彼とはうまくいっている。私たちは結婚前夜なのだろう。Rは汚名を返上して何の肩書かはわからないが会社にも社長とともに現れるようになった。さらに驚いたのはRが武者小路のインタビューに応じている番組がウイークデイーの十時半からとはいえTVに流れたことだった。この世界は儲かる方法が見つかれば一夜でスターにのし上がることは可能であった。今度ばかりはRにも気まぐれな女神が微笑みかけているのかも知れなかった。けれどもすでにひとみには無関係な世界になりつつあった。頑なだった彼があたしと逢うと微笑んでくれるようになった。それだけでもひとみには幸福の訪れのような気がしてならないのだった。
（了）